

ハンドボール競技におけるセットオフenseの有効的な戦術について

—様々なディフェンスシステムに対する攻撃に着目して—

氏名 平川 愛里 (200912067、ハンドボール方法論)

指導教員：藤本 元、會田 宏、山田 永子

キーワード：攻撃戦術、様々なディフェンスシステム、有効的

【目的】

ハンドボール競技におけるセットオフenseは、様々なディフェンスシステムに対し、コンスタントに得点するために打開策をもっておかなければならない。女子を対象に、セットオフenseの有効的なオフense戦術を明らかにするために、様々なディフェンスシステムに着目して行った研究はされていない。そこで本研究では、大学生女子チームを対象にし、様々なディフェンスシステムに対する有効的なオフense戦術を明らかにすることを目的とする。とともに、本研究が今後指導者として指導する時の一助となる資料を得ることを目的とする。

【方法】

平成 24 年度関東学生ハンドボール女子春季リーグ戦の上位 4 チームの 6 試合を研究対象とし、オフenseがシュート達成あるいは、ミスで終わるまでの攻撃を、私案の分析票を用いて分析項目についてカウントした。フリースローやプレーが中断された場合は中断前のプレーはカウントせず、中断後の新たな攻撃の始まりからカウントした。分析項目は以下の項目である。

分析項目：(1)ディフェンスシステム、(2)きっかけ局面、(3)均衡打破局面、(4)継続・展開局面、(5)結果、(6)シュートの種類、(7)結果に至るまでの経路

統計処理については、カイ 2 乗検定と残差分析を行い、統計的有意水準はいずれも 5%とした。

【結果と考察】

1. ディフェンスシステム別の経路の比較

セットオフenseの経路は、オープンディフェンス、クローズディフェンスのいずれに対しても、きっかけを行い、均衡打破でディフェンスを崩し継続・展開しシュートに至る、あるいは、きっかけから均衡打破し、そのままダイレクトにシュートに至る経路が高い割合を示した。これらの結果は、いずれのディフェンスシステムに対しても均衡打破局面がなければ相手ディフェンスを崩すことや、突破しシュートに至ることは非常に難しいことが推察される。

2. オープンディフェンスに対して

ポジションプレーをきっかけとした場合は、クロ

スプレーをし、継続・展開を経てシュートに至る、または、ディフェンスの段差を利用してダブルポストへの移行を行い、ずらしの継続・展開を経てシュートに至る攻撃が多いことがわかった。フリースローをきっかけとした場合は、前につめ孤立したディフェンスに対して強い 1 対 1 からシュートに至る攻撃が多いことがわかった。よって、オープンディフェンスに対してのフリースローは、ディフェンスの段差ができ、スペースが広がっている瞬間を攻めることが有効的であると考えられる。システムチェンジをきっかけとした場合は、ポストプレーヤーがスライドプレーを行うことでマークミスが起りシュートに至る攻撃が多いことがわかった。

3. クローズディフェンスに対して

ポジションプレーをきっかけとした場合は、クロスプレーの後ダブルポストへ移行し、ディフェンスをさげてシュートに至る、あるいは、ポストプレーヤーをスライドさせ、マークミスを誘いカットインまたは、ポストシュートに至る攻撃が多いことがわかった。フリースローをきっかけとした場合は、均衡打破から切り返しのパスをし、ディフェンスをずらしシュートに至る、または、フリースローのスクリーンプレーを利用しダイレクトにシュートを狙う攻撃が多いことがわかった。クローズディフェンスに対しては、一線のディフェンスラインを崩すために意図的にディフェンスを引きつける動きや、スペースをつくるための動きが有効的であると考えられる。

【結論】

これらの結果から、①オープンディフェンスおよびクローズディフェンスに対するセットオフenseは、きっかけ→均衡打破→継続・展開→シュートに至る経路が最も多いこと、②オープンディフェンスに対しては、ディフェンスの広がったスペースを利用する攻撃戦術が有効的であること、③クローズディフェンスに対しては、ディフェンスのマークミスを誘う、またはディフェンスラインを意図的に下げるための攻撃戦術が有効的であることが明らかになった。したがって、以上のことを踏まえた攻撃戦術の指導が必要になると考えられる。